

日本道德教育方法学会第29回研究発表大会プログラム

期日 2023年6月10日(土)、11日(日)

会場 日本大学工学部(〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1番地)

※4月現在の対応として、70号館入口で検温と手指消毒にご協力をお願いしております。

状況等が変わりましたら学会ホームページ等でお知らせいたします。

大会準備委員会 委員長 渡邊 真魚(日本大学工学部)

主催 日本道德教育方法学会

大会参加費 2,000円・・・会員、非会員ともWeb受付(申込み)により徴収します。

※昼食は、Web申込み時にお弁当のご案内をいたします。なお、土曜日のみ、学食も使えます。

(紙上開催への変更の場合も大会参加費は返金致しませんので、ご承知おきください。)

情報交換会 6,000円

【第1日】6月10日(土)

12:30 13:00 14:55 15:10 17:40 18:00 20:00

受付	自由課題研究発表 分科会Ⅰ～Ⅲ	シンポジウム	情報交換会
----	--------------------	--------	-------

休憩室(7034教室)

受付 12時30分～13時00分

自由課題研究発表 (発表25分・質疑30分)

分科会Ⅰ(7033教室) 司会: 服部 敬一(大阪成蹊大学)

13:00～13:55 ① 学習者の感性を考え議論する道德に活かす

丸岡 慎弥(立命館小学校)

14:00～14:55 ② 子どもの「おたずね」を軸にした道德科授業

～子どもの問い返し～

由良 健一(兵庫県尼崎市立潮小学校)

分科会Ⅱ(7032教室) 司会: 柴原 弘志(京都産業大学)

13:00～13:55 ① 子どもから出にくい本音を確実に出すICTを用いた方策の試みと検討①

—児童はアバターをどのように受け入れたか—

○加藤 英樹(愛知県名古屋市立南陵小学校)

天野 幸輔(名古屋学院大学)

14:00～14:55 ② 子どもから出にくい本音を確実に出すICTを用いた方策の試みと検討②

—道德科におけるアバター導入授業の展望—

○天野 幸輔(名古屋学院大学)

加藤 英樹(愛知県名古屋市立南陵小学校)

分科会Ⅲ(7035教室) 司会: 毛内 嘉威(秋田公立美術大学)

13:00～13:55 ① 自由の権利と義務～「人間の魅力」から公德心(住みよい社会)を考える・

「オーストリアのマス川」「美しい鳥取砂丘」の実践～

松原 弘(大阪府和泉市立郷荘中学校)

14:00～14:55 ② 道德科における自己の学びを記録する学習ツールに関する

児童の意識と個別最適な学び

○安井 政樹(札幌国際大学)

森 直也(和歌山県和歌山市立岡崎小学校)

震災の記憶と道德教育 ―郷土への思いを継承していく教育の可能性―

企画趣旨

福島県郡山市で行われるということから、今回のシンポジウムでは、東日本大震災を経験・体験した児童生徒たちの郷土「福島」への思いを、どのように継承していけばいいのかを考える企画となった。

震災から10年以上が経過して、子どもたちにとって郷土「福島」への思いは、震災の実体験を直接伝えられる状況から、すでに過去の出来事となった経験・体験の記憶を思い起こし、復興してきた姿を継承していかなければならない状況に移りつつある。

このような状況において、言語学的に注目したいのは「福島」という言葉の「シニフィアン」（特定のシンボル）と「シニフィエ」（特定の想起内容）の関係性（ソシュール）である。しかも、その関係性は、非常に複雑な布置関係を形成しつつある。すでに「福島」という言葉は、様々なシンボルとしてカテゴライズ化され始めているとあってよいだろう。例えば、震災によって4000名近くもの死者・行方不明者が出たカストロフィー（歴史的な大惨事）の＜地＞のシンボルとして、逆に悲劇から立ち直り、復興を果たしつつある＜地＞のシンボル等、「福島」には多様なシンボルによるカテゴライズ化がなされている。しかもこのような多様なカテゴライズ化を通して、我々はそこから想起されるイメージの具体的内容に、さらに様々な「意味づけ」を行っている。

このような複雑な様相を呈してきた「福島」という言葉に、とりわけ道徳的な意味づけを行いながら、郷土「福島」への思いを後世に継承していくことは極めて難しい教育課題になっている。すでに当時の経験・体験を直接知っている子どもたちは成長し、当時を知らない子どもたちが多くなっている現実と対峙しながら、教師は郷土「福島」への思いをどのように教え、伝えていけばいいのだろうか。

その際に注意したいのは、本来多様なシニフィアンとシニフィエを持っているべき「福島」に、固定化されたイメージを与えてしまうことである。特に道德教育で注意したいのは、固定化されたイメージで郷土「福島」への思いを、特定の価値づけによって共有化してしまうことであろう。本来、被災地「福島」に対する我々の思いは多種多様であり、その多様性を十分に理解しながら、郷土「福島」への思いを伝えていく必要があるのではないだろうか。

今回のシンポジウムでは、2名のシンポジストに2名の指定討論者を立てて、4名の討議が深くクロスしていくような展開に期待したい。

◇ シンポジスト

山名 淳（東京大学）
鈴木 篤（九州大学）

◇ 指定討論者

西野真由美（国立教育政策研究所）
吉田 尚（現学校法人いわき秀英学園小中高等学校、元いわき市教育委員会教育長）

◇ 司 会

上地 完治（琉球大学）

【第2日】6月11日（日）

8:30	9:00	11:55	13:00	13:55 14:00	16:00
受付	自由課題研究発表 分科会Ⅳ～分科会Ⅵ	昼食	会員総会	課題研究	

休憩室（7034教室）

受付 8時30分 ～ 9時00分

自由課題研究発表（発表25分・質疑30分）

分科会Ⅳ（7033教室） 司会： 白木みどり（金沢工業大学）

9:00～9:55 ① 道德教育推進教師に求められる資質・能力に関する一考察
今川 美幸（兵庫県教育委員会事務局）

10:00～10:55 ② 生徒が法やきまりの意義を理解する道德学習
ー教材『二通の手紙』を取り上げてー
服部 敬一（大阪成蹊大学）

11:00～11:55 ③ 体験をもとにした道德教育の推進
～「震災」・「がん教育」を取り上げた実践を通して～
榊原 康夫（福島県田村市立常葉小学校）

分科会Ⅴ（7032教室） 司会： 七條 正典（香川大学【名誉】）

9:00～9:55 ① 道德科と特別活動を関連させた情報モラル教育に関する研究
○椋木 香子（宮崎大学大学院教育学研究科）
武田 眞昂（宮崎県延岡市立岡富小学校）

10:00～10:55 ② 価値観創造世界での“エージェンシー”の高まり
～ダブルループ思考を活用して～
柴田八重子（愛知淑徳大学【非】）

11:00～11:55 ③ 「事例／範例」を通じた道德的変容に関する一考察
杉田 浩崇（広島大学）

分科会Ⅵ（7035教室） 司会： 金光 靖樹（大阪教育大学）

9:00～9:55 ① 道德科における内容項目「国際理解」に関する授業実践とその検討
高口 涼（静岡県富士市立東小学校）

10:00～10:55 ② 子どもの切実な問いから協働探究していく学びを創る
ー東日本大震災を扱った単元学習を通してー
鈴木 賢一（愛知県弥富市立十四山東部小学校）

11:00～11:55 ③ ICT機器を活用した道德科の授業の一考察
～1人1台端末の持ち帰り学習を通して～
溝口 哲志（三重県津市立美杉小学校）

会員総会（7014教室） 13時00分 ～ 13時55分

「震災」の記憶を風化させず、子どもたちの「生きる力」を育む

－「震災」を取り上げた道徳科や道徳教育の実践から学ぶ－

企画趣旨

「震災」は、多くの生命や財産を奪い、私たちの心の中に大きな悲しみを残す。

その一方で、「震災」からの復興を通して、私たちは、私たち人間のもつ力の大きさ、人々のつながりの深さ、共に生きることの喜びや感謝、郷土に対する愛着や誇りを心から再確認し、それらは私たちが生きていく支えとなる。

大事なことは、「震災」の記憶を風化させず、「震災」からの復興の中で得られた多くのものを伝承し、未来に向かって生きる力にしていけることである。

私たちは、東日本大震災や阪神淡路大震災などの「震災」において、悲しい経験をしてきた。しかし、その悲しみの中から、人々は力を合わせて立ち上がり、共に生き、次の世代へとつなぐ努力と取り組みをしてきた。

学校教育においては、「震災」からの復興から得られた多くのものを、学びの場において取り上げ、子どもたちの生きる力につなぐ取り組みが進められてきた。道徳教育や道徳科においても、例えば、それぞれの地域で教材が作られ、その実践が進められてきた。その取り組みは、私たち人間のもつ力の大きさ、人々のつながりの深さ、共に生きることの喜びや感謝、郷土に対する愛着や誇りを自覚し、生き方へとつなぐものであり、その取り組みは、「震災」の被害を受けた地域の子どもたちに限られるものではなく、すべての地域の子どもたちに資するものであると考える。

しかし、残念ながら、被害を受けた地域から離れてしまうと、どうしても遠くの出来事であると考えてしまったり、その取り組みは使えないと考えてしまったりしがちである。また、「震災」の被害を受けた地域においても、子どもだけでなく指導者が「震災」の経験あるいは記憶がないという課題もある。

今回の課題研究では、「震災」を取り上げた道徳科や道徳教育の実践から学ぶことを通して、すべての地域、すべての学校、すべての子どもたちや教職員が、「震災」の記憶を風化させず、子どもたちの「生きる力」につなぐ道徳教育や道徳科の在り方や進め方について考えていく機会としたい。

◇ 課題研究 発表者

- 小学校での実践の立場から 由良 健一（兵庫県尼崎市立潮小学校）
- 中学校での実践の立場から 阿部 洋己（福島県福島市立松陵中学校）
- 大学での教員養成の立場から 佐藤 郷美（東北福祉大学）
- 教育行政の立場から 浅見 哲也（十文字学園女子大学）

◇ 司会・進行

田沼 茂紀（國學院大學）

【大会校協賛企画について】

大会準備委員会では第29回研究発表大会の協賛企画として、エクスカーション「福島の今を見て聞いて語る体験型見学会」を実施します。公式Webサイトのトップページにあるリンクから詳細をご確認のうえ、参加を希望される場合は大会参加申込サイトにてお申し込みください。